インタビュー

いまを語りあう

哲学研究者　**永井玲衣**さん

ながい　れい／人びとと考えあう場である哲学対話をひらく。写真家・八木咲とのユニット「せんそうってプロジェクト」などでも活動。著書に『水中の哲学者たち』（晶文社）『世界の適切な保存』（講談社）。第17回「わたくし、つまりNobody賞」受賞

第1回　哲学は日常的な営み

誰もが哲学している

私は、全国のいろんな場所に赴いて「哲学対話」という対話の場をひらく活動をしています。ひらく場はさまざまで、学校、企業、お寺、美術館、音楽ライブでやることも、デモの場でやることもあります。また、そこで聞いたり感じたりしたことを書く作家としても活動しています。

「哲学」というと、学問的で専門的ですごくおそろしい響きをもっているように感じられますが、私は日常的な営みだと思っています。日々の中で「なぜだろう？」と思ったことを立ち止まって考えてみるという営みそのもの。そう考えると、私たちは常に哲学してしまっているし、誰もが哲学しています。

哲学対話の場でいろんな方に出会うと、「私、全然考えてないんです」「忙しくて思考停止してしまっています」とみなさん言われるのですが、場をひらいてみるとみんな考えているし、「問い」をもっている。そんな実態に直面すると、誰もが考えていて問いをもっているのに、それを表現できる場があるだろうかという問題意識が立ち上がってくる。だからこそ哲学対話の場をひらいています。対話することで、問いや考えを表現しあってそれを聴きあう場をつくっている、そんなふうに考えています。

哲学対話をひらく時、私は、「よく聴きあおう」「偉い人の言葉を使うのではなくて、へたくそでもいいから自分の言葉で語り出してみよう」「それは人それぞれですよね、とまとめないで、そこから手を伸ばして考える時間にしてみよう」そんな約束をみんなとすることで対話的な場をともにつくっていく働きかけをしています。

私たちは集ったり、相手の考えを聴きあったりする場はすごく緊張しますよね。正解を言わないといけない、わからないと言えない、急がないといけない、そう感じたりしてしまうことを、ていねいにひっくり返していく場づくりを意識しています。たとえ見ず知らずの人とでも、よくわからなくても、ここを対話的な場にしてみようと試みること自体を私は目的にしていますし、この社会の中で対話的な場をつくろうとする営みそのものが哲学対話のもつ重要な役割だと思っています。

哲学は何もばかにしない

そうして哲学対話を始める時は、参加者の方から問いを出してもらいます。日々どんなことにモヤモヤしているとか、わかったふりをしているけど本当はよくわからないとか、ずっと気になっているとか、そういったことを聞いていきます。私はそんな中から出てくる等身大で、人肌が感じられるような「手のひらサイズの問い」がすごく好きです。

その中からひとつスタート地点をつけて、みんなと言葉を交わして掘り下げていきます。ある地域で哲学対話をひらいた時には、参加していたおばあちゃんが、雑草が抜いても抜いても生えてくるんだという話をしてくれて、そこでふと「なぜ雑草を抜いてしまうのか」という問いが立ち上がりました。どっちだっていいじゃんと思えるようなことでも、問いになった瞬間みんなそこに引きずり込まれていきます。「そもそも雑草ってなんだっけ」「なんで抜いちゃうのかな」「綺麗にしたいからじゃない」「なんで綺麗にしなきゃいけないの」と、枝が伸びるように問いが育っていく。そしてこの問いは最終的に「なぜ異物と思えるものを排除するのか」という社会的な問いになっていきました。

私は、哲学は何もばかにしないところが好きです。回り道しながら大事な話ができるというところが哲学対話のよさだと思っています。

水中の哲学者たち
晶文社

若き哲学研究者にして、哲学対話のファシリテーターによる、哲学のおもしろさ、不思議さ、世界のわからなさを伝える哲学エッセイ